産経新聞
平成26年(2014年)6月14日 土曜日
H26.6.14

Dr.和の町医者日記

「胃腸」シリーズ⑦

ステージⅣの大腸がん

手術と抗がん剤で完治する場合も

今日は進行した大腸がんの話です。大腸がんができて腸管腔が狭くなると、便秘や腹部膨満感などの自覚症状が出ます。その段階で初めて医療機関を受診して検査すると大きな大腸がんが発見される場合が時々あります。「便潜血反応による検診を受けていればもっと早く発見できたのに」との後悔が頭をよぎります。

このケースに当てはまるある人の検査を進めていくと、肝臓と肺に転移巣が見つかりました。肝臓に直径5㌢と3㌢のものが2つ、肺には直径2㌢のものが1つ。遠く離れた臓器に転移が見つかれば、がんのステージは自動的に一番上のⅣとなります。

一般にステージⅣというと「もう末期」というイメージがあるかもしれませんが、大腸がんの場合は全く違います。「まだまだこれから」なのです。前立腺がんや乳がんについてもそうです。

ステージⅣの大腸がんのこの人は、まず大腸を外科的に切除しました。その後、肝臓と肺の転移巣も切除しました。他にも転移巣があるのかもしれませんが、とりあえず画像診断で見える病巣を全部取り除きました。この人の場合は、抗がん剤治療を間にはさみながら計3回の手術が行われました。

その後、10年近く経過した現在でも全く再発がありません。外来に来られてもピンピンしていて、ゴルフを楽しまれています。がんが完治したのです。全身に散らばっていたであろう目に見えない小さながん細胞は、抗がん剤治療や自身が持つ自然免疫で消失したものだと考えられます。術前に数千もあった腫瘍(しゅよう)マーカーはずっと正常範囲なので、がん細胞は隠れているのではなく、完全に消えたと考えるのが妥当でしょう。

こうした臨床例を実際に見ていると「大腸がんはあきらめてはいけない。ステージⅣでも完治例があるんだ!」と現代医学の進歩に驚くばかりです。町医者として外来診療や在宅医療の中で例にあげたような方に出会うのが楽しみです。

昨今、「がんの早期発見・早期治療は全く意味がない」「どうせ死ぬのだからがんは放置したほうが得だ」「医者の口車に乗って治療したら殺されるぞ!」と恐怖をあおる一般書がミリオンセラーになり、書店の店頭に並んでいます。しかし、もしステージⅣの大腸がん患者さんが、それを読んで治療を拒否していたらどうだったでしょうか。1年、いや、数カ月以内に亡くなっていたでしょう。

実際に治療した結果、完治している。数カ月でがん死することと、病気が完治して天寿を全うできるのとでは雲泥の差です。ですから「手術も抗がん剤も無意味」という主張は完全に間違っています。もちろん、高齢者やさまざまな理由で衰弱した方なら、がんは放っておいたほうが得な場合もあります。そんなことは医療の常識です。患者さんの利益が不利益を上回る場合のみに、手術や抗がん剤治療を行います。

もっと詳しく知りたい人は、拙書「医療否定本に殺されないための48の真実」(扶桑社、翻訳本が海外でも出ています)や「抗がん剤・10のやめどき」(ブックマン社)、そして近著「抗がん剤が効く人、効かない人」(PHP研究所)などを読んでいただき、ぜひ参考にしてください。患者さんもがん治療について勉強して後悔のないがん医療を受けてください。

長尾和宏(ながお・かずひろ)
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで〝人を診る〟総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。55歳。

ステージⅣ がんの進行度を表す数字。その臓器内、周囲のリンパ節や遠隔臓器への広がりからそれぞれの専門学会が定めるステージが決められる。0~Ⅳまで5段階ある。大腸がんの場合、ステージ0の5年生存率は94%、ステージⅣでは19%である。

ひょうご